余の宗教觀

川口智隨

宗教の本旨は宇宙の全体を説明し、吾人の本体を論ずる者にして、人間を離れ人生を離れて宗教は無いのである。よしありとするも吾々に不必要である故に、宗教に依つて一切人類は救濟せられ且つ國家も安泰なる事が出來るのである。宗教は神佛に對する所謂信仰にして、一切衆生に遮惡修繕勸善懲惡を教へ人生をして稜苦與樂し安心立命を得せしむるか宗教の目的、即ち着眼點である。宗教の内にも佛教あり、神教あり、キリスト教あり、基督の唱へしキリスト教は歐米諸國と最も深き關係を有し、西洋の文明はキリストを離れて價値なしと迄云へるが如く、政治文學哲學より美術風俗に至る迄社會の事物概ね其の影響を受けて發達進歩せしものあり、又神教は日本古來よりの宗教にして、神の信仰にして即ち祖先崇拜あり、佛教は釋尊印度に出現され、一代五十年間の説法教を佛教と云ふのであつて、此の佛教吾が國に傳來せるや西洋に於てのキリスト教の如く、政治界文學界美術工藝其他のあらゆる事物に至る迄此の佛教に影響を受けざるはなかつたのである。故に日本は佛教を離れて價値なしと云へるが如く、佛教に影響を蒙りし事は少なくなかつたのである。佛教神教キリスト教等皆國家發達進歩の基礎となつて今日に至る文明を見るに至つたのである。故に國家に於ても宗教の必要を認むるのである。又認めねばならぬのである。宗教思想の觀念があつて初めて人は遮惡修善の心も起るのであろうと思ふ。それでは宗教なる者は諸惡莫作衆善奉行すれば宗教の必要はない樣に思はれるが、宗教は單に遮惡修善勸善懲惡のみに限らず、人生をして精神的慰安を與ふると云ふが第一である。其の精神的慰安とは何んであるか、即ち娑婆即寂光凡即佛と悟り安心立命を得せしむるのである。キリスト教の如きヘブライ人が祖先より信奉せし一神教を化成せし如き根抵なき教や、日本古來の神教の如きに於

ては、到底人生をして安心立命を得せしむる事は出來んと思ふ。佛敎に依つて初めて得られるかと確信するのである。然し佛敎とは云へ釋尊一代五十年間の御說法華經阿含方等槃若と四十二年が間說法敎化を遊ばされ、法華經を說かんとするに當つて、四十餘年未顯眞實と云ひ、今迄四十餘年間の說法は未だ眞實を顯さゞる權經方便にして、今說く處の法華經こそ本懷の經であると云つて御說き遊したるが、法華經八ヶ年の說敎である。して見れば佛敎とは云へ、爾前權敎方便たる念佛禪宗淨土等の諸宗旨に於ては、到底安心立命は覺束ないと思ふ。何とあれば禪宗の如く、直指單傳不立文字と云つて、釋尊の說を外にする禪宗は譬へば父の敎を聞かずして他の家の人の敎を聞くと同樣に非道極まる禪宗や、又厭離娑婆欣求淨土を主張し、現世成佛を言はず、單に往生成佛のみを主張する未來主義の念佛宗等に於ては、精神慰安を與へると云ふ事は到底駄目である。出世の本懷たる法華經こそ現世成佛、即ち即身成佛を說き、吾々は凡夫たりと雖も、妙法五字の題目を唱ふる時は凡夫即佛であり、久遠の本佛である故に、吾々が住む娑婆即佛の住む寂光土で、凡夫の所作即佛の所作にして、諸作佛事凡即佛と說く法華經こそ人生をして安心立命を得せしめ、心安らかに暮し行く事が出來るのである。故に佛敎とは云へ、權敎あり、實敎あれば、實敎たる法華經に依らざれば出來んのである。法華經は因果の法則を最も嚴格に應用して居るのであつて、一般佛敎の用して居る不生不滅の思想中にある處の萬象は初めて生ぜし物にあらず、又將來滅するものでもなく、本來實在の物であると云ふ意義を極めて嚴格に說明したる者である。小乘權敎に於ては宇宙を眞空なりと見、他の諸經では多く抽象的の實在を論じ居るが、法華經に於ては、不生不滅の理を說き顯し、現象即實在の意義を說て居るのである。故に法華經に依らずんば一切人類を救濟して心安からしむる事は出來んのである。安心立命とは換言すれば自己の佛性を知る事なり。然るに法華經は一切衆

生悉有佛性と說き迷へる故に凡夫强情の修行をなし悟る時は佛ある事の自覺を敎へて居るけれども諸經に於ては然らず、譬て云へば暗がりに光明がある、其の光明を尊むとは云ふけれども、未だ玉を見出し得ないと同樣に、幾ら光を點じた處が其の處に存する光る玉を見附あければ、矢張眞の吾人を知ると云ふ事は出來ない。吾々は幾ら悟つて色々の德を積んで見た所が、自己の佛性ある事を自覺してそれを開發し向上しあければ、丁度暗室の中に唯光りを點じて玉を見ざると同樣に、眞に解脫する事は出來あいのである。吾人佛性ある事を悟らなければ、何時迄も迷より覺めて安心立命を得ると云ふ事は出來ないのである。世間に於て佛敎は厭世主義消極主義非國家主義である等の非難されるのも要するに爾前權經に於ての非難にして、法華經の國家主義開顯主義統一主義と云ふ上より見れば、佛敎決して厭世的にあらず、惡平等非國家的のものではあいと思ふ。實敎たる法經に依らざれは國家統一はたろか、衆生濟度して安心立命を得せしむる事は出來あいのである。吾々日常生活して行く上に就ても、宗敎の信念力に依つて苦を樂を轉じて我々に奮鬪力を起さしめ、樂しく其の業務に從事する樣にあるのである、是れ偏に宗敎の價値ある所以にして、我々生活して行く上に於て宗敎なる物があかつたならば、一增人は惡事を働く事と思ふ。宗敎に依つて祖先崇拜の念あれば自然遮惡修善の心も起る、從つて國家も安泰ある事が出來るのである。故に國家としても宗敎は大切ある者であつて、日常生活と密接ある關係を有する事は明也。故に宗敎に依つて太平ある國家、平穩ある家庭も出來得る者あれば、宗敎の研鑽に勉むべきあり。

余の宗敎觀

辻　能　學

宗敎とは宇宙の神秘を開出し、專ら人心の奧底を支配するものにして、實に世界文明の源泉とも